

米連邦最高裁判所判事「RBG」ことルース・ベイダー・ギンズバーグが9月、87歳で没しました。最高裁の外には多くの花束が捧げられ、SNSには哀悼のメッセージがあふれました。これほどまで熱狂的に愛された最高裁判事が、かつて存在したでしょうか。

ニューヨーク・ブルックリン生まれのユダヤ系、女性というだけで数々の差別を経験し、ハーバードでは子育てしながら猛勉強しました。誰もが自分の能力を自由に発揮できる社会の実現を目指し、1970年代から法廷で勝利を積み重ね、93年に最高裁判事

## 【ルース・ベイダー・ギンズバーグ】



AFP

# 「襟飾りの判事」 平等への信念

に指名されてからも一貫して性差別のない社会の実現に貢献してきました。

人気が発達したのは、トランプ政権が発足した頃でしょうか。少数派の権利を守るために言葉

を尽くす彼女の動向がブログで伝えられ、絵本やTシャツ、マグカップまで出回るように。ドキュメンタリー

や自伝映画も作られました。

黒い法衣の上につける襟飾りがトレードマーク。白いレ

ースもあれば、世界各地から

## Style アイコン

贈られたカラフルなものも多数派として弁論する際は黄色が印象的な襟、反対者として弁論する際は黒いメタリックな襟、と時々で意味を持たせることもあったそうです。

襟飾りは、レディーとしての品位と法廷での権威は両立するというメッセージにも映ります。男性のまねではなく、自分らしくあることが

真の平等につながるという信念に基づくスタイルです。法廷の外でも、原色、大胆

な柄、大ぶりのアクセサリなど、難しい要素をすんなり着こなしました。個性を押しつづさず、人も自分も心地よくする絶妙な美的センスがうかがえます。

法律の解釈で相対する立場の判事と法廷外では親友だったというエピソードが、彼女の清潔さを象徴します。意見は対立しても、人格は愛する。反対意見は、対立をおおるためではなく、全ての人がフェアに共存できる社会を目指すから。分断が進む時代だからこそ、永遠のロールモデルとして仰ぎ見たい、チャールミングで気骨あるヒーローです。(エッセイスト 中野香織)